千葉県佐倉市

佐倉城跡遺構確認調査概報

1980

財団法人千葉県文化財センター

凡　　例

1．本書は、国立歴史民俗博物館（仮称）屋外展示場Ｄ地区の遺構確認及び近世佐倉城遺構の確認調査の概報である。

2．本調査は、文化庁の委託によって財団法人千葉県文化財センターが実施した。

調査期間は、昭和54年12月11日から昭和55年３月31日（整理期間を含む）までである。

3．本調査は、当センター調査部班長堀部昭夫、調査研究員高田博が担当した。

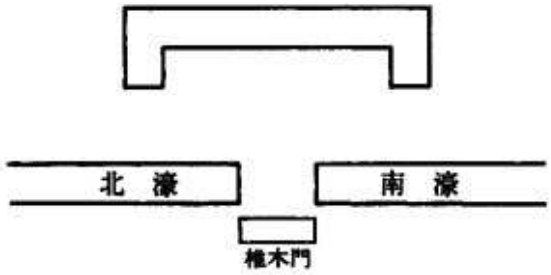
4．本書の執筆、編集は、堀部、高田が行い調査部長白石竹雄が補筆した。

5．調査の遂行、報告書の刊行にあたっては、文化庁文化財保護部管理課の御指導をうけた。

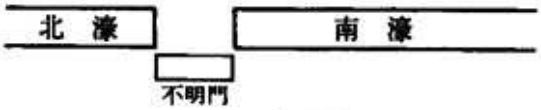
また、関係各機関の方々には、調査に際して御協力、御支援をいただいた。

記して厚く感謝の意を表します。

また、原稿執筆に際し、二の丸、三の丸の濠については、下図のようにそれぞれの曲輪から門に向って左側を北濠、右側を南濠と便宜的に呼称した。



三の丸地区



二の丸地区

目　　次

Ⅰ．はじめに…… 1
Ⅱ．検出された遺構…… 2
Ⅲ．出土遺物…… 7
Ⅳ．小結……10

挿　　図

第１図　トレンチ配置図
第２図　Ｂ１トレンチ遺構検出状況
第３図　Ｂ２トレンチ遺構検出状況
第４図　Ｃ１トレンチ遺構検出状況
第５図　Ｂ５･Ｂ６トレンチ遺構検出状況
第６図　Ｃ１トレンチ拡張区土層断面図
第７図　Ｃ１トレンチ模式図
第８図　Ｃ２トレンチ遺構検出状況
第９図　Ｂ３トレンチ遺構検出状況
第10図　不明門推定図
第11図　椎木門推定図
第12図　Ｂ４拡張区遺構検出状況
第13図　001号住居跡実測図
第14図　二の丸土塁土層断面図
第15図　出土遺物実測図（001号住居跡）
第16図　出土遺物実測図（Ｂ３・Ｂ４トレンチ）
第17図　出土遺物実測図（Ｂ４・Ｃ１トレンチ）

図　　版

図版１　Ｂ１トレンチ馬出濠・Ｂ２トレンチ空濠
図版２　Ｂ２・Ｃ２トレンチ
図版３　Ｂ３トレンチ空濠(二の丸)
図版４　Ｂ３トレンチ(二の丸東濠)・ C1トレンチ(001住居跡)
図版５　Ｃ１トレンチ
図版６　土塁断面
図版７　建物跡

I　はじめに

佐倉城は、慶長15年（1610）4月に小見川から移封された土井利勝が、徳川家康の命により約6年の歳月をかけ、元和2年（1616）頃に完成させたといわれている。

築城から明治4年（1871）の廃城までの約250年、東の要城としての佐倉城には代々譜代代名が封じられてきた。

廃城後の明治6年（1873）、陸軍第一軍営御二師管の営所が設置されてから、昭和20年（1945）の終戦による陸軍解体まで、佐倉城の跡地は陸軍（佐倉第57連隊）の兵営として使用されてきた。

そして、昭和41年以降、明治百年記念事業の一環として、国立歴史民俗博物館（仮称）の建設計画が文化庁で練られてきたが、昭和45年になって博物館建設予定地として佐倉城跡の国有地が内定、昭和52年度から建設工事に着工し現在に至っている。

このため、千葉県は昭和46年以来、文化庁の委託をうけて、佐倉城跡の遺構遺存状況の確認と記録保存の発掘調査を実施してきた。

今回の調査は、（財）千葉県文化財センターが文化庁の委託をうけ、佐倉城跡における地下遺構の遺存状況を確認するため実施したものであり、調査対象地の屋外展示場D地区は、旧国立佐倉療養所跡地であり、佐倉城椎木門から不明門までの三の丸地区に相当するところである。

なお、佐倉城については、多数の絵図や文献古記録が残されているばかりでなく、下記のような刊行物もあるので、佐倉城の歴史的変遷についてはそれらを参照願いたい。

1次	46. 7. 25～46. 8. 13	椎木曲輪、三の丸	400m²
2次	51. 6. 1～51. 8. 31	椎木曲輪、馬出し地区	1,300m²
3次	52. 1. 28～52. 3. 28	（竪穴住居跡群）	1,200m²
4次	52. 10. 20～53. 3. 31	椎木曲輪、屋外展示場B地区	1,200m²

文　献

篠丸　頼彦　『佐倉市史巻一』佐倉市　昭和46. 3.

〃　「佐倉城の歴史」佐倉市　昭和41. 10.

荒木伸介、加藤晋平　「国立歴史民俗博物館設置予定地内遺構調査報告書」千葉県教育委員会　1971

森　尚登　「国立歴史民俗博物館（仮称）設置予定地内遺構確認調査報告書」財団法人千葉県文化財センター　1976

石田　広美　「国立歴史民俗博物館（仮称）建設予定地発掘調査概報」財団法人千葉県文化財センター　1977

渡辺　守由　「古今佐倉真佐子」佐倉市教育委員会　昭和47. 11.

宇田川興三郎　『佐倉城史』　昭和28. 8.

篠丸　頼彦　「佐倉城とその周辺」『月刊文化財』94号　昭和46. 7.

大類　伸　『日本城郭史料集』人物往来社　昭和43. 7.

Ⅱ　検出された遺構

(1) 馬出

コの字形を呈する馬出濠は、第１次調査においてその一部が検出され、空濠は磁北に対して西へ約40度振れ、長手方向の幅は約10ｍ、折曲り方向で約12ｍの幅であることが明らかにされた。

さらに、昭和51年度の第２次調査では一部の未調査部を残して濠の全容がほぼ判明した。

今回の調査は、旧療養所看護婦宿舎の中庭に設定したＢ１トレンチで馬出濠の一部が検出されたので、この部分を拡張した結果コーナー部が確認された。（第２図）（図版１）

そして、これまでの調査結果によって馬出濠を復原すると第２図模式図に示したようになり、椎木門に伴う三の丸濠との間は 11.75 ｍとなる。

(2) 三の丸濠

三の丸濠は、馬出濠・二の丸濠とともに明治14年には埋められており、北濠確認のため、Ａ５・Ｂ２・Ｂ５・Ｂ６・Ｃ１を、また、南濠確認のため椎木門推定地とされている一部にＤ１トレンチを設定した。

Ａ５・Ｂ５・Ｂ６トレンチで濠上端部が、Ｂ２トレンチでは濠の両上端を検出し、北濠幅が約28ｍであり、馬出濠との間隔は前述の如く 11.75 ｍであることが明らかになった。　（第３図）

道路と建物の間に設定したＣ１トレンチ北側では、現地表下約60㎝のローム層中に構築された001号住居跡が検出されたが、住居跡は北濠によって３分の１ほど削平されていた。

また、Ｃ１南側で山砂を中心に、粘土や小ロームブロックなどを用いた版築状堆積層を調査している段階で、第４図のセクション図に示したような急傾斜の落込みがみられ、これがＢ５・Ｂ６トレンチでの北濠上端部のライン（第５図）と一致することから、Ｃ１トレンチにおける三の丸濠の上端部であることがわかった。

しかし調査を進めている段階で、この山砂の版築状堆積層が、どんな性格のものなのかという疑問がつねにつきまとっていたので、Ｃ１トレンチを拡張し、解明に努めた。

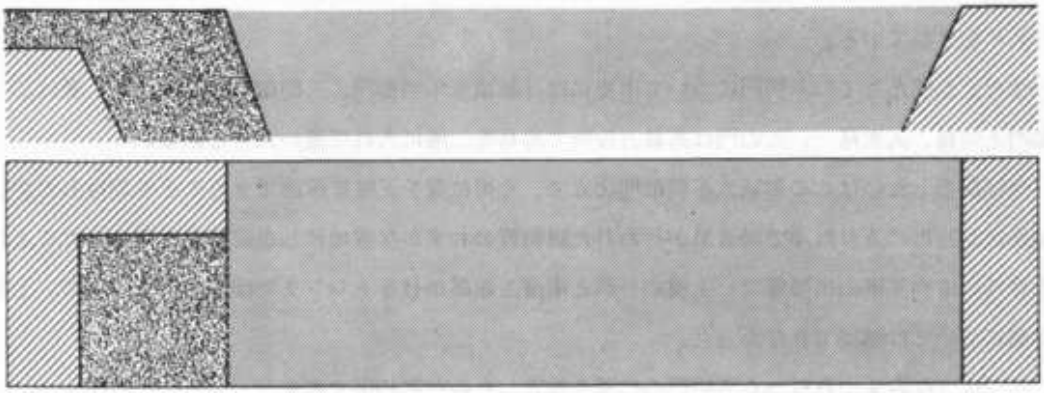
その結果、第４図に示したように、現地表下約１ｍで旧表土があり、この層から当初予想した三の丸北濠ラインとは異った急傾斜の濠状の落込みが検出され、この落込み線は第６図に示した土層断面でも確認された。(図版1.2)

またこの遺構は、巾12～13㎝の工具を使い、かなり急角度で掘り込まれ、三の丸に約10ｍ突出する形状を示し、第４図の平面図に示したように、この遺構が掘削された後に堆積した旧表土と思われる土層があることから、掘削から山砂の版築状堆積層の堆積まで時間的差違のあったことがわかった。

三の丸南濠の上端部確認のため設定したＤ１トレンチでは現地表下約60㎝で黒色土がみられ、約

90cmでソフトローム層上面と自然堆積が認められたことから、この部分が椎木門の土橋の一部であることが明らかになり、しかも、南濠は、連隊時代に若干埋められてはいるものの、ほぼ現状に近い形状であることが明らかになった。

以上の点から、三の丸北濠の突出部と山砂の版築状堆積層について考えてみると、佐倉城が中世末期の千葉氏の鹿島城を再建したものと伝えられ、もともと三の丸濠は、この鹿島城に伴う濠で、佐倉城築城に際し、三の丸濠にめぐる土塁を椎木門築造とともに築いたことによって、突出部が埋められたという経過を想定することができよう。（第７図）



第７図　C1トレンチ模式図

西辺と南辺は、鹿島川と高崎川の低湿地に面し、北辺も同じ低湿地であり、三方が天然の要害となっていて、しかも城の構えが石垣を用いず、空濠、土塁によっていて、近世城郭でありながら、中世的様相を多分に示している佐倉城と、中世鹿島城との関連を考えるうえでこの三の丸濠突出部のもつ意義は大きく、椎木門の位置確認とともに今後の調査の課題といえよう。

(3)　二の丸濠

この濠は、明治14年の５千分の１の迅速図によると、三の丸北半分に設けられた衛戍病院の敷地となっていて、馬出濠、三の丸濠とともにこの時期に埋められていた。

とくに南濠は、連隊時代とその後の療養所時代にかけての多量の土砂と廃棄物で埋没している。

そこで、北濠確認のためA3.4トレンチ、南濠確認のためＢ３とＣ２トレンチを設定。

Ｂ３及びＣ２トレンチでは濠の上端部が、また、旧療養所調理室のコンクリート基礎をとりのぞいて設定したＢ３トレンチでは南濠のコーナー部分と不明門へ通ずる土橋の一部を確認するにとどまり、北濠上端部は検出出来なかった。（第８.９図）（図版５）

(4) 不明門

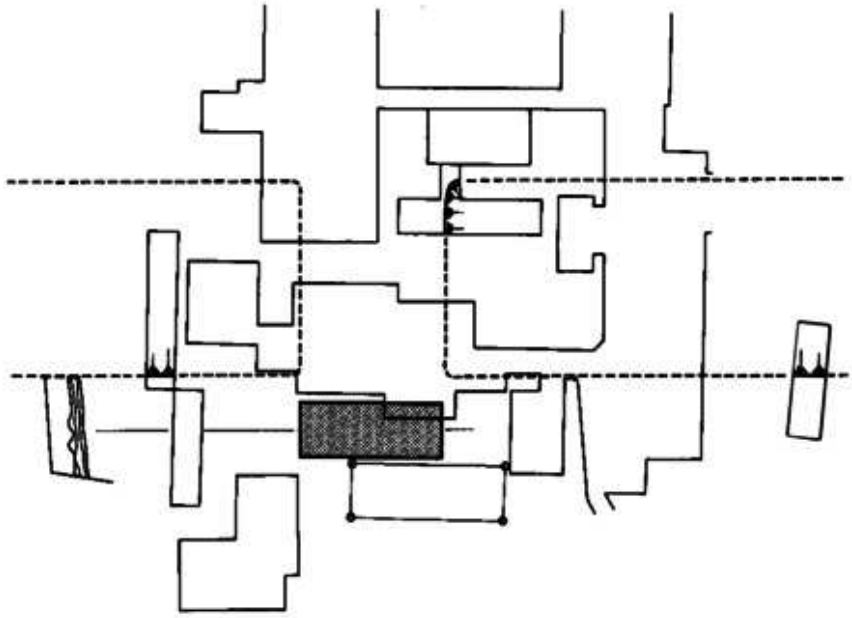
佐倉城には、鹿島川に面した鹿島不明門と、二の丸北門としての不明門とがある。

鹿島不明門については佐倉市史巻１に、「鹿島不明門、四間梁六間作り、畳十二畳、袖塀拾壱間板笠、升形竹矢来四十九間二尺」とあり、「真佐子」には、「あかず門、二階間にて有之、是は籠城の節の落口の門也、かわら葺しゃちほこ附、一切あけず〆切、番人なし」とあり、稲葉氏の頃には閉鎖されていて、長い間塩硝蔵として用いられていたことが年寄部屋日記（宝暦三年五月二十三日）に記されている。

また、北門としての不明門について市史には「御城米不明御門、三間梁八間二階作り、畳は二ノ御門と同様、天水桶一、この門は馬具方役所で馬具を二階に入れて置いた」とある。

今回調査したのはこの御城米不明御門の方で、その位置を正確に確認できることを期待したが、調査区が複雑に入り組んで増改築が行われた建物群のわずかな空地にしか設定できなかったことと予想外の建物基礎の出現等で、上橋の一部と南濠上端部がＢ３トレンチで確認されたのみで、土橋の幅については確認できなかった。

このような若干の資料から不明門の位置を推定したのが第10図である。



第10図　不明門推定地

これは、

1. 土橋の幅は、不明門の三間梁八間と同じであること。

2. 二の丸北濠に伴う土塁の中心線と不明門の棟筋が同一線上にある。

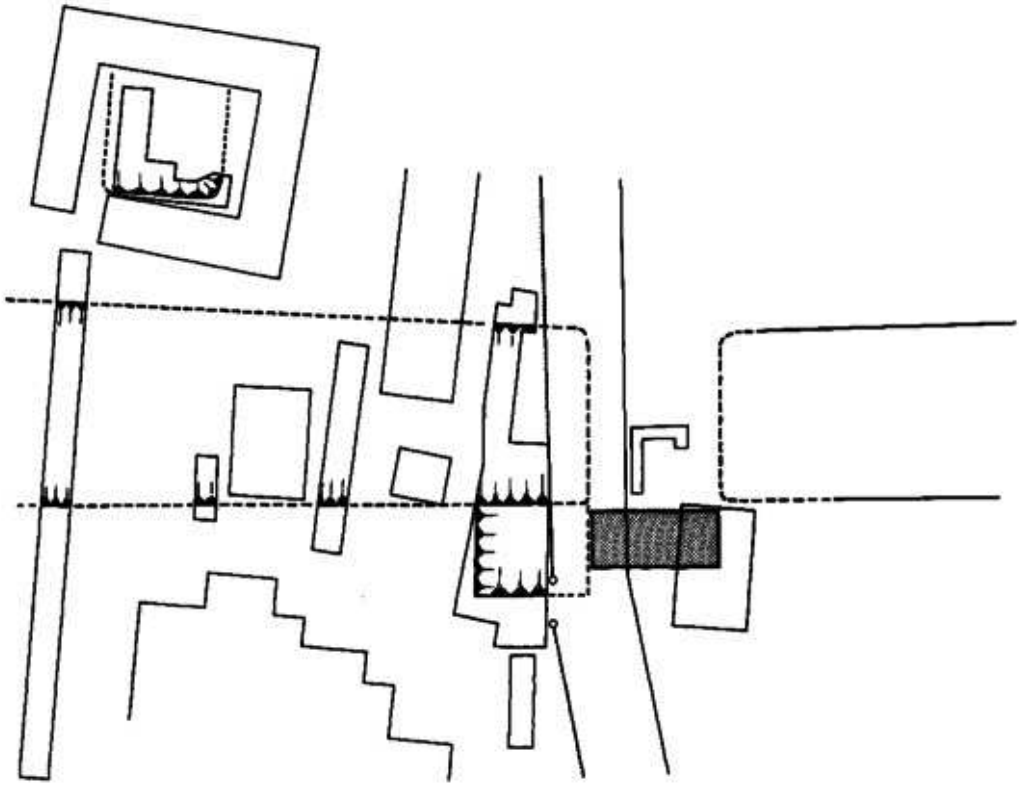
ということを前提とし、二の丸南濠上端部ラインを基準として割り出したものであるが、B4トレンチ拡張区では不明門に伴うと思われる遺構は検出されていない。

(5) 椎木門

佐倉市史巻1に

「椎木御門、三間梁二七間二階作り、畳数三ノ御門ニ同シ、袖塀十六間五寸板笠、矢挟間拾」とある椎木門については、三の丸濠の旧状確認とともにその位置を明らかにすることを目的としたが不明門と同様、土橋の一部を確認したのみである。

しかし、三の丸濠の調査によって得られた資料から、不明門の位置を推定した方法によって椎木門の位置を推定すると第11図のような位置、すなわち、旧連隊時代の建物と現在の道路の直下に位置することになる。



第11図　椎木門推定図

(6) その他遺構

Ｂ４トレンチで建物礎石とみられるものが検出されたので、拡張区を設定し調査した結果、梁間３間、桁行９間の東西棟の建物跡であることがわかった。（図版７）

建物は第12図のとおり、２×３間の土間が２室、床構造をもつ１室の間取りであり、それぞれの土間には北に面して柱間１間の入口がある。

床構造の１室は梁間３間、桁行５間であり、この部分だけが総柱である。

側柱礎石には河原石が使用されていて、礎石の残っているものと、礎石がすでに失われ、基礎の根石のみが残存しているものとがある。

また、側柱と側柱の間には床束柱の礎石があるが、建物南側の床束柱礎石には小児頭大の扁平な割石が用いられ、北側の床束柱には、側柱礎石とほぼ同じくらいの大きさの河原石が使われている。

また、東と西の妻側柱の間には、礎石がみられないことから妻側は１間ごとの側柱のみであったと思われる。

側柱の柱掘方は、ハードローム層中に深さ約25cm、大きさ約70cm四方で掘込まれ、打ち割った根石を縦にならべて、その間隙に、若干の荒砂と小砂利を固くつきかため、その上に礎石をのせている。

また、根石と礎石との間には、瓦が楔として用いられ、さらに根石と礎石との間に赤土と小砂利を混ぜた土が充填され、礎石が固定されていた。

床束柱の礎石には、側柱礎石より小型の河原石と、割石が用いられている。いずれも側柱のような柱掘方はみられず、ローム層上面にわずかな凹みをつくり、そこに小砂利を入れ突固め、その上に礎石を置いた状態である。

また、北側壁４間目のところには、礎石の際から外へ約50cm、巾１.８ｍで、石片と小砂利を用いたタタキ状の遺構が検出されたが、この中にレンガの破片が２個一緒に突き固められているのが注目された。

また、南側柱心から約60cmほど外側には雨落ちと思われる浅い溝状のくぼみがあることから、軒の出が比較的浅いこと、さらに柱の配列や束柱痕などからみて、この建物は倉庫として使用された可能性が考えられる。

しかし、佐倉城に関する絵図によると、二の丸には、御城米不明門とＬ型の米蔵、及び城主在城の折の住いとしての対面所が設けられているだけであり、該当する建物はみられない。

しかも、明治14年の迅速図にも当該建物は記入されていないことから、この建物がいつ頃建てられたか不明である。

さらに、この建物が第10図に示したように、推定した御城米不明門と軒を接するほどになり、門が築城当初から存在したとすると、佐倉城廃城までの間、この建物の建設は不可能に近い。

いずれにしても、この建物跡の性格を明らかにする必要がある訳で、不明門の位置確定の問題と

あわせ、今後の課題としたい。

(7) 001号住居跡

C1トレンチ北側でソフトローム層に掘り込まれた北壁と西壁の一部のみが検出された。他は調査区外と障害物で未調査である。（図版6）

部分的発掘であるので全体の規模は不明であるが、幅約20cmの周溝がほぼ全周すると思われ、床面は固く踏みかためられている。

住居跡コーナー部の周溝中にピットが1個所検出された。

壁高は約80cmあり、遺物は少量で、ほとんどが覆土中の出土である。

この住居跡は、第13図に示したように、三の丸北濠によって切断されている。

(8) 土塁

佐倉城の構えは、石垣を用いず、土塁、空濠によっており、近世城郭でありながら中世的な様相を示している。

各曲輪には濠とともに土塁が巡らされ、いまでも、本丸と、二の丸、三の丸の一部にその名残りがみられるが、長い年月の間の変形が著しく、その旧状を正確に把握することは困難である。

しかし、今回の調査では、二の丸にある土塁の一部が削られ、積土が露出していた部分があったので、この部分をL型に切断し、土塁構築状況を確認した。（第14図）

その結果、土塁は凹凸のある旧表土の上にロームブロックを中心に若干の砂、黒色土、粘土を混ぜたほぼ水平の基盤ともいうべき層を築いた上に、多量のロームブロックを盛り固め、さらにその上に成田層の砂を互積みしている。

また、第13図に示したように、黒土（旧表土）からソフトローム層にかけて1本の溝が二の丸濠の方へ掘られていた。

この溝は、土塁構築土で埋められていることから、土塁構築以前に掘られたものであることは明らかであるが、どんな性格の溝であるか不明である。（図版6）

Ⅲ　出　土　置　物

(1) 001号住居跡出土遺物（第15図）

本住居跡から出土した遺物は須恵器杯口縁及び底部片9点、同甕、甑片2点、土師器甕形土器片26点ですべて破片である。

(1)〜(6)は須恵器杯である。(1)は口縁から底部の¼が残存しており、復原口径13.8cm、器高4.0cm底径9.0cmを計る。体部はロクロで調整され、ロクロ目を多く残している。ロクロ回転は右廻りで

ある。底部は回転ヘラ切りされたのちに一定方向にヘラ削りされ、体部下端は手持ちヘラ削りされる。内外面共に灰白色の色調で、胎土中に石英を多量に含み、焼成は良好で堅緻に焼かれている。(2)は口縁から底部の⅛残存しており、復原口径11.8 cm、器高 3.5 cm、底径 8.4 cmに復原された。調整等は(1)と同様であるが、体部外面は平滑に仕上げられている。内外面共に灰白色の色調で、胎土中に雲母、石英を多量に含み、焼成は良好で堅緻である。(3)は底部のみ⅓残存している。復原底径 9.4 cm、残存器高 1.2 cmを計る。体部の調整は(1)と同様で、底部は回転ヘラ切りののちに不定方向へヘラ削りされている。内外面共に青灰色の色調で、胎土中に石英を多量に含み、焼成は良好で堅緻である。(4)は底部の½程残存し、復原底径 9.4 cm、残存器高 1.9 cmを計る。体部の調整は(1)と同様であるが、外面下端に弱いヘラ削りが施される。底部は回転ヘラ切りののちに不定方向にヘラ削りされる。灰褐色の色調で、内外面に煤が付着している。胎土中に雲母を含み、焼成は焼きしめが悪い。(5)は底部のみ⅙残存する。復原底径 8.0 cmを計る。器壁は薄く、外面底部は一定方向へヘラ削りされ平端で、内面底部はロクロ目を残し、ロクロ回転は右廻りである。内外面共に青灰色の色調で、胎土中に石英を多量に含み、焼成は良好で堅緻である。(6)は底部の⅔残存する。底径 8.0 cm残存器高 1.7 cmを計る。体部の調整は(1)と同様であるが、底部は回転ヘラ切りののちに再度回転ヘラ削りされる。内外面共に灰白色の色調で、胎土中に石英を多量に含み、焼成は良好で堅緻である。(7)は土師器甕形土器口縁の破片である。口縁は頭部から強く外側に屈曲し、口唇はつまみ上げられ外側は若干内湾しながら立上がる。内外面共に暗赤褐色の色調で、胎土中に多量の石英を含む。焼成は良好である。(8)は土師器甕形土器底部である。底部の½残存する。底径 7.5 cm、残存器高 2.0 cmを計る。湾曲する底部で器壁は厚い。外面暗茶褐色、内面黒褐色の色調で、胎土中に多量の石英を含み、雲母を若干含む。焼成は焼きしめが悪い。(9)は土師器甕形土器底部である。胴部下半から底部の⅙残存している。復原底径10.0 cm、残存器高 5.7 cmを計る。体部は細かいヘラ削り、内面はヘラによる平滑化ののちヘラナデ、底部は木葉痕を残し、のちナデが施される。外面暗赤褐色、内面暗黄褐色の色調で、胎土中に雲母、石英を含み、焼成は良好で堅緻である。(10)は須恵器甑胴部下端である。⅙程残存している。復原底径16.8 cm、残存器高 4.1 cmを計り大形であることが推定される。外面は横位の大きな単位のヘラ削り、内面はヘラナデ、内面下端はヘラにより面取りされる。内外面共に灰褐色の色調で、胎土中に雲母、石英を含む。焼成は焼きしめが悪い。

(2) 明治時代の陶磁器 (第16図)

(1)〜(7)は明治時代初期の日常雑器として生産された瀬戸焼である。(1)は染付皿で口径15.8 cm、器高 4.8 cm、底径 8.8 cmを計る。転写による花模様、幾何学文様が口縁の内外と、見込み部に施文されている。呉須の発色は濃紺である。(2)は染付湯呑茶碗で底部のみ残存している。底部 4.6 cm、残存器高 2.7 cmを計る。底部は高台の再調整時に深く削られている。(3)は染付どんぶりの蓋で口径13.8 cm、器高 3.9 cm、つまみ部の径は 6.0 cmを計る。外面体部と内面口縁に花模様が施文され

る。(4)・(5)は蓋付の向付で身は口径11.0 cm、器高 3. 9 cm、底径10.0 cmを計り、蓋は口径 9. 0 cm、器高 1. 7 cmを計る。身の体部外面と蓋の天井部外面に花模様が施文される。蓋の口縁は内湾してゆき端部は薄く削り出される。(6)は染付の蓋で口径 9. 0 cm、器高 2. 9 cm、径 1. 6 cmのつまみを有する。手書による花模様が天井部外面に施文される。(7)は湯呑茶碗蓋で口径 6. 6 cm、器高 2. 3 cm、径 1. 2 cmのつまみを有する。(6)と同様に天井部外面に手書による花模様が施文される。(8)・(9)は明治時代初期の軍隊によって専用に使用されたと思われる牛乳びん、どんぶりである。(8)は口径 5. 8 cm、器高 9. 2 cm、底径 3. 4 cmを計り、(9)は口径14.6 cm、器高 6. 0 cm、底径 3. 4 cmを計り、両者ともに乳白色に発色し、(9)は口縁外面に 2 条の緑色の平行線を施している。

(3) 鉄製品、古銭 (第16図)

⑽は鉄釘で、全長14.2 cm、幅 1. 2 cm、厚さ 0. 6cmを計る。頭の部分はL字形にまがり、身は湾曲している。遺存状況はよい。

⑾永楽通宝。 ⑿〜⒁寛永通宝。

(4) 瓦 (第17図)

(1)〜(4)の軒丸瓦のほかに平瓦、丸瓦の破片が多量に出土している。ローマ字が刻印されたものも出土しており、明治時代に生産されたものと考えられる。(1)〜(3)は「巴」の紋を有し、(4)は「左巴」の紋を有する。(5)〜(8)は軒平瓦が接合した桟瓦で、「巴」の紋を有する。(9)は鬼瓦の破片で「丸に二つ引」の両引紋を有する。

篠丸頼彦氏によれば、佐倉城の巴瓦は現在まで 3 種類がわかっているが、その内 1 種類は元和元年の創建時の左巴瓦であるという。

第 4 図 土層断面図土層註記

1. 砂　利
2. 黒色土＋ローム粒＋砂利
3. 砂＋粘土＋ローム粒
4. 砂＋黒色土
5. 砂＋粘土＋瓦
6. 暗褐色土＋ロームブロック
7. 砂＋ロームブロック＋黒色土
8. 砂　層
9. 砂＋暗褐色土
10. 砂＋ローム粒＋瓦
11. 山　砂　層
12. 山砂＋小ロームブロック
13. 砂＋ロームブロック＋粘土
14. 砂＋小ロームブロック＋粘土
15. 砂＋ロームブロック＋山砂
16. ローム粒＋黒色土
17. 砂＋ローム粒＋黒色土
18. 砂＋ロームブロック＋シルト
19. 山砂＋ロームブロック
20. 山　砂　層

21. 山砂＋黒色土
22. 山砂＋褐色土＋ロームブロック
23. 黒色土層
24. ローム粒を主体とする
25. 山砂＋ロームブロック＋黒色土
26. 山砂＋シルトブロック
27. 山砂＋シルトブロック＋黒色土
28. 山砂層（瓦を含む）
29. 山砂＋小ロームブロック
30. 黒色土層

Ⅳ　小　結

今回の調査は、博物館屋外展示場D地区、すなわち、旧国立佐倉療養所跡地が対象となり、地下遺構の遺存状況を確認し、博物館設置の検討資料を得るため実施したものである。

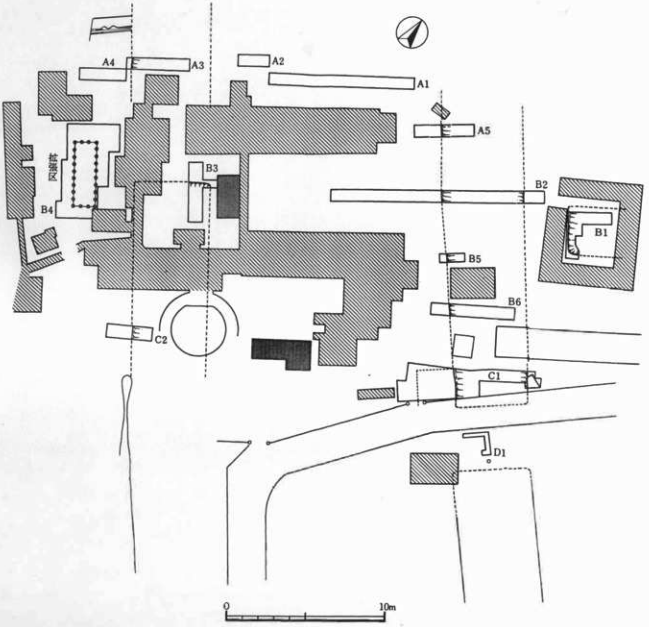
この地区は、佐倉城の二の丸から三の丸曲輪に相当するところであるが、廃城から昭和20年の終戦に至る長い期間、陸軍の兵営として使用され、さらに戦後約30余年は療養所として使用されてきた。

このような歴史を経てきた佐倉城跡に調査の手が入ったのが昭和46年。以来数次にわたる調査によって、絵図によってしかわからなかった近世佐倉城の姿が次々と明らかになってきた。

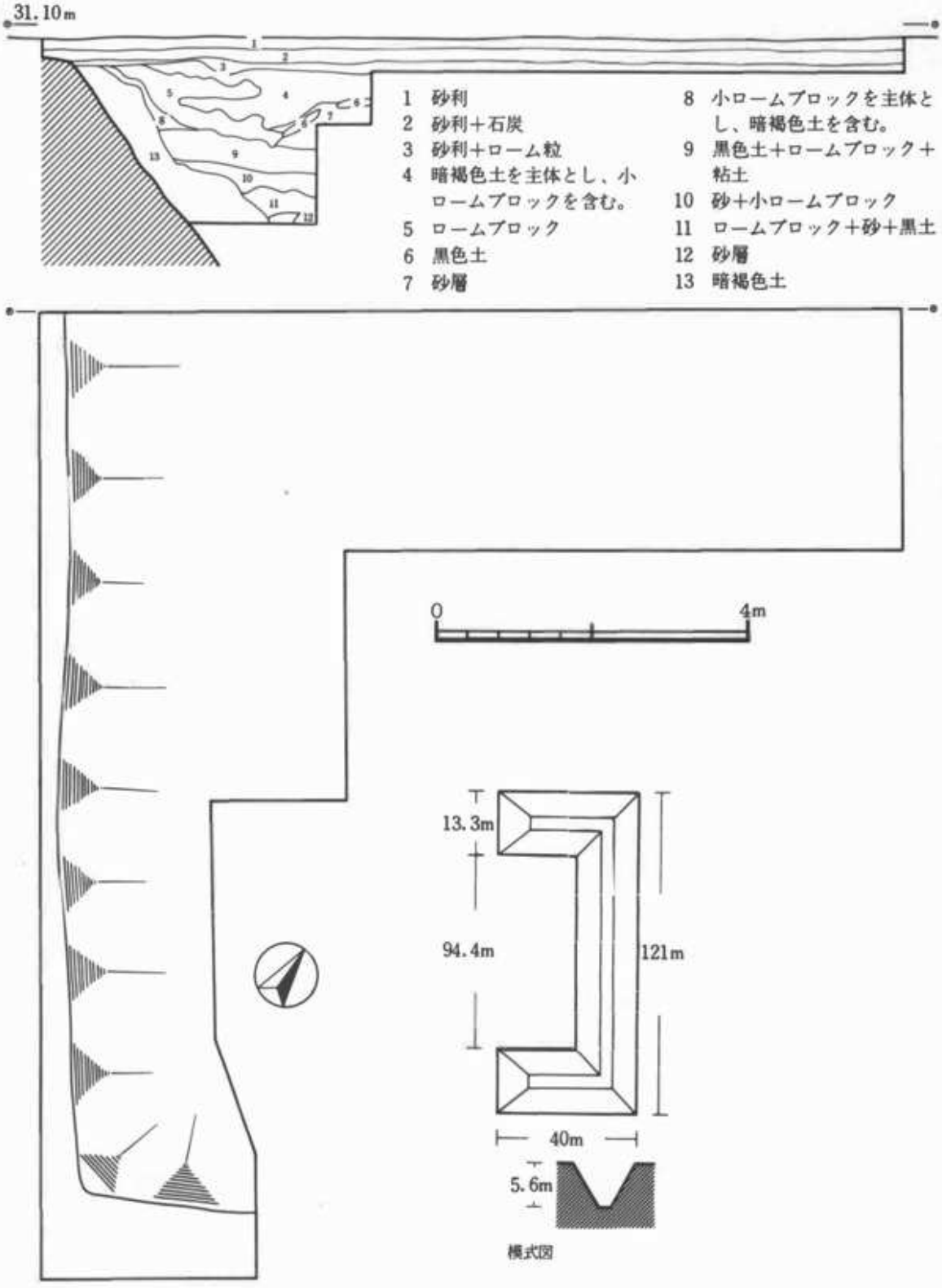
今回の調査でも、地下遺構、具体的には埋没している二の丸、三の丸、馬出の各濠と、不明門、椎木門の位置を確認することが大きな目的の１つであった。

調査は、建物基礎、道路のアスファルト、土間コンクリートの除去という難作業を経てやっと地下遺構の確認ができるという状況の中で進められ、当初目的とした不明門、椎木門の位置こそ確認できなかったが、二の丸、三の丸の濠の確認、馬出濠の規模の解明と、それなりに成果は得られた。

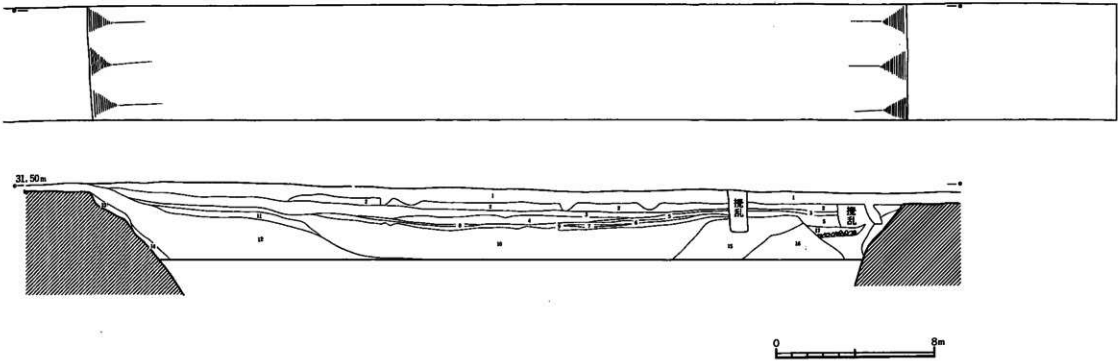
しかし、道路や建物等で位置が判明しなかった不明門、椎木門の位置確認と、不明門に隣接して検出された建物跡の用途や性格は今後の調査で明らかにする課題である。



第１図　トレンチ配置図

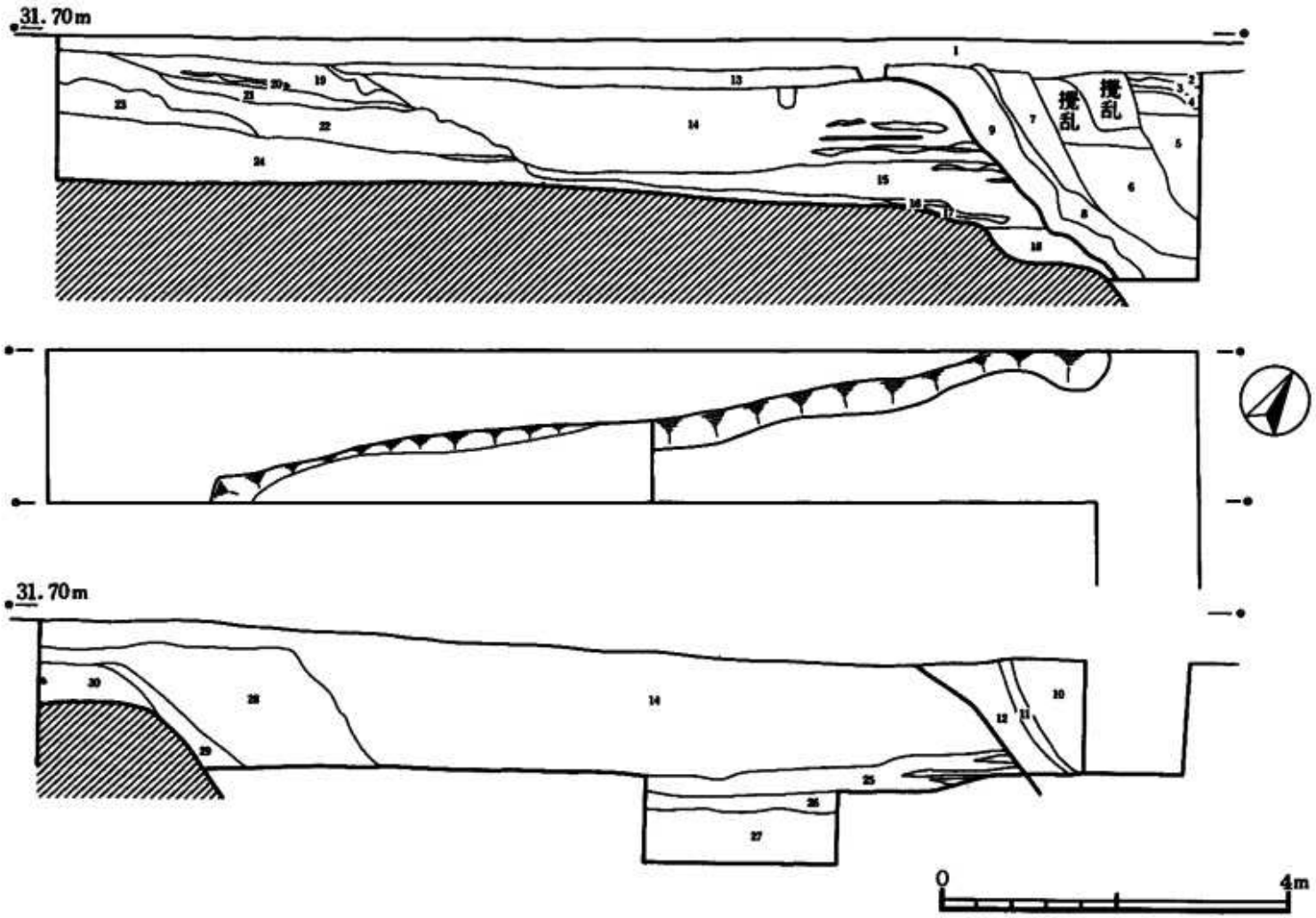


第２図　B1トレンチ遺構検出状況（馬出濠コーナー部）

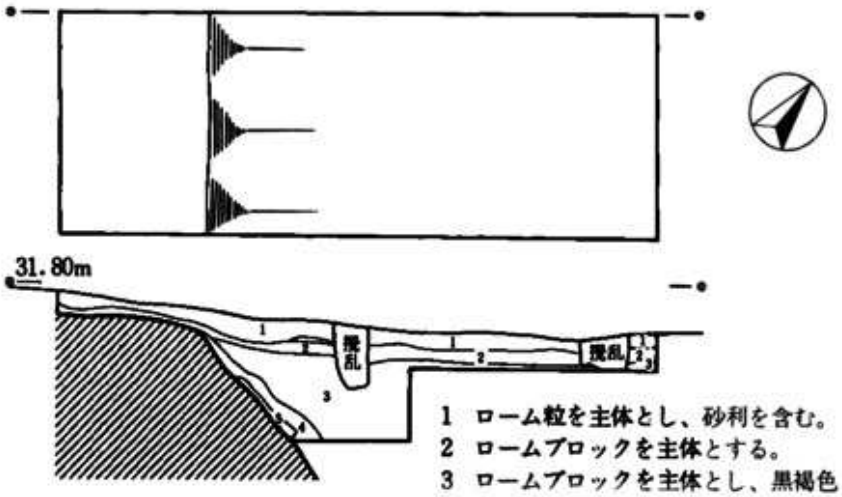


1　砂利
2　ローム粒を主体とする。（ローム再堆積）
3　2と同様。
4　シックイ（壁材）の埋土
5　ローム粒及び黒色土を主体とする。
6　ローム粒を主体とする。
7　6と同様。
8　ローム粒及び黒色土を主体とする。
9　ロームブロックを主体とする。
10　黒色土を主体とし、ロームブロックを含む。
11　黒色土を主体とし、ローム粒を含む。
12　黒色土＋ロームブロック
13　明褐色土
14　暗褐色土
15　ロームブロックを主体とし、黒色土を含む。しまりない。
16　10と同様。
17　小砂利＋瓦層（建物の基礎）

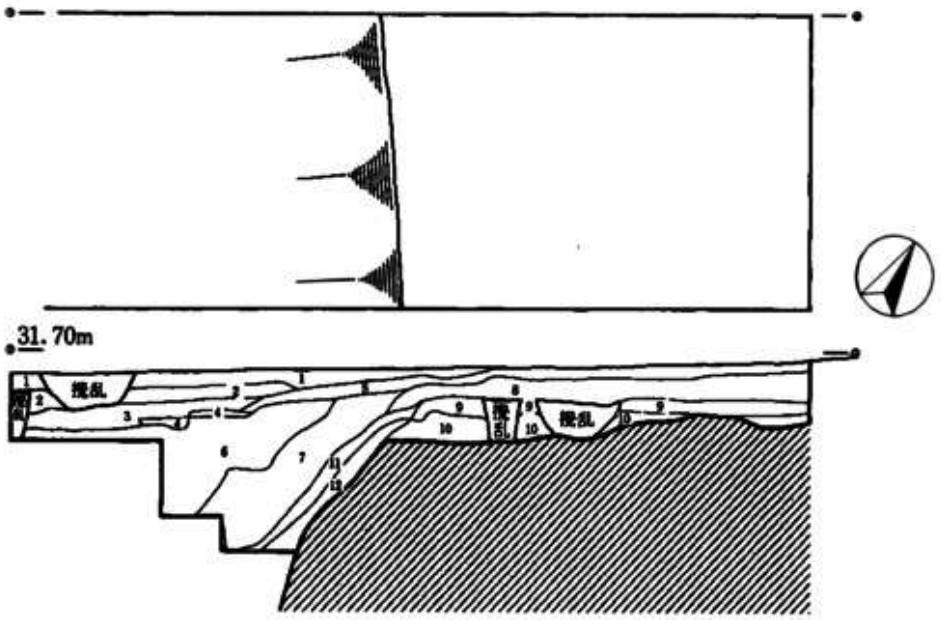
第３図　B2トレンチ遺構検出状況（三の丸濠）



第4図　C1トレンチ遺構検出状況（三の丸濠）

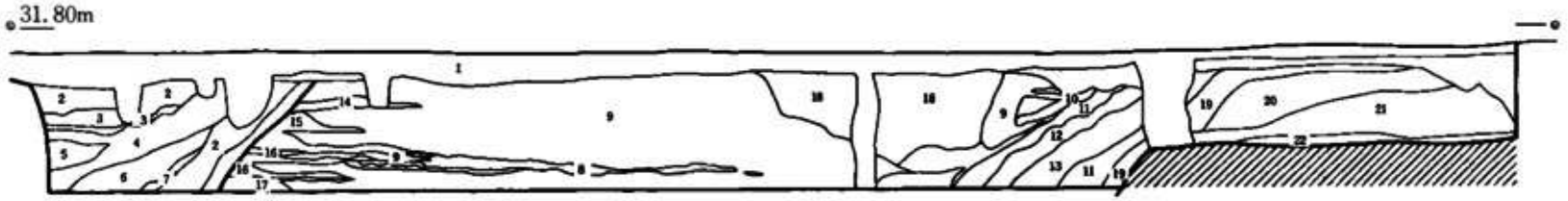


1 ローム粒を主体とし、砂利を含む。
2 ロームブロックを主体とする。
3 ロームブロックを主体とし、黒褐色土を含む。
4 明褐色土層。
5 ローム粒を主体とする。

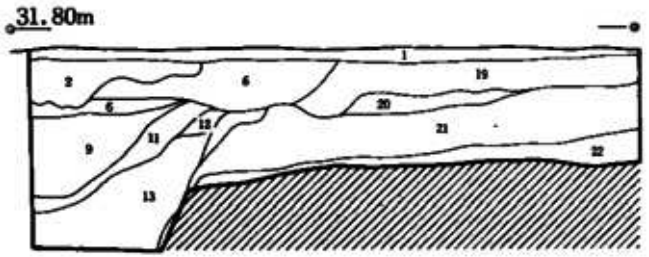


1 ロームブロックを主体とする。
2 暗褐色土を主体とし、ロームブロック、瓦を含む。
3 明褐色土を主体とする。ロームブロックを含む。
4 黒色土
5 明褐色土、ロームブロックを主体とする。
6 粘土、砂粒、ロームブロックを主体とする。黒色土が混入する。
7 砂粒を主体とし、粘土、小ロームブロックを含む。
8 明褐色土、ロームブロックを主体とする。
9 褐色土、ロームブロックを主体とする。
10 褐色土、小ロームブロックを主体とする。
11 褐色土を主体とする。
12 暗褐色土を主体とする。

第5図　B5．B6トレンチ遺構検出状況（三の丸濠）

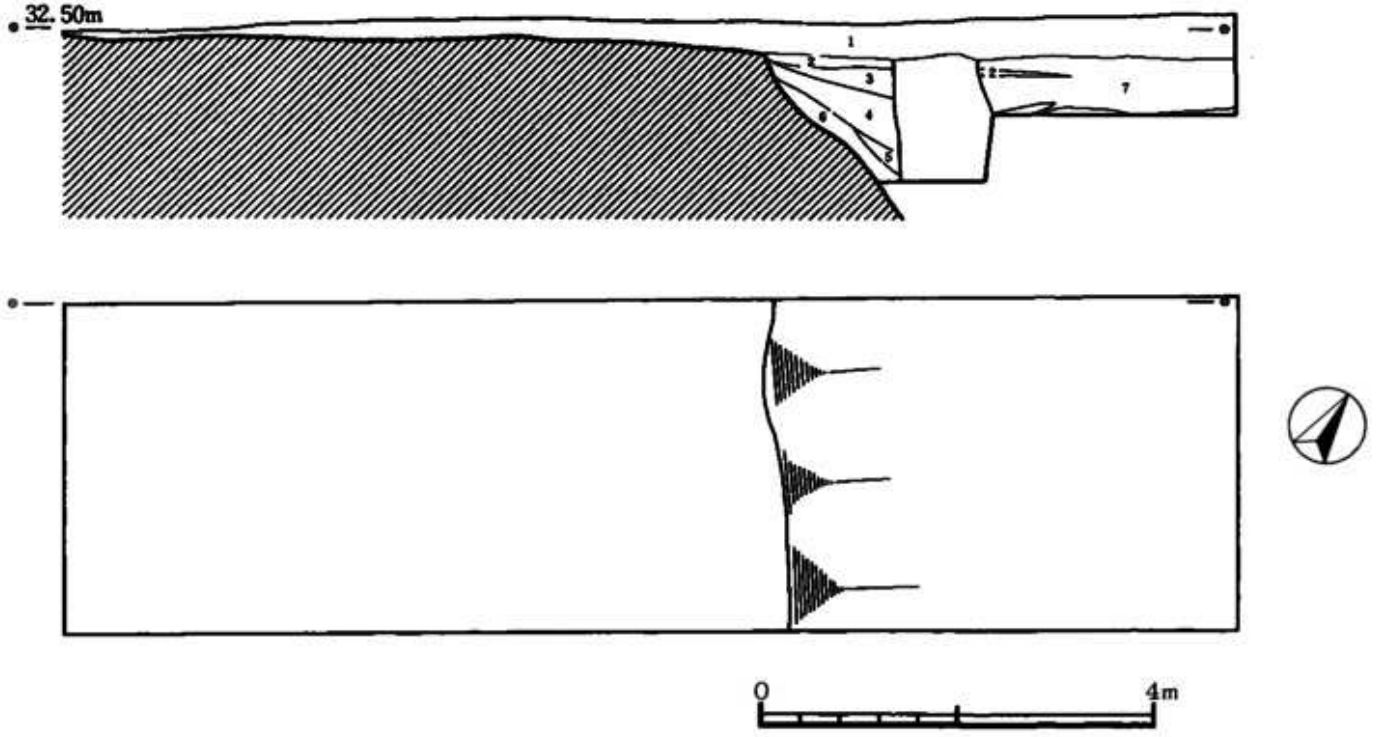


1　明褐色土、砂利を含む。
2　茶褐色土を主体とし、ローム粒、山砂を含む。
3　山砂層
4　茶褐色土を主体とし、小ロームブロックを含む。
5　山砂を主体とし、ロームブロック、シルトブロックを含む。
6　暗褐色土を主体とし、山砂、シルトを含む。
7　山砂を主体とし、茶褐色土を含む。
8　暗黄褐色を主体とし、ロームブロックを含む。
9　山砂を主体とし、シルトブロック、鉄分を含む。
10　9に比して山砂の割合が多い。
11　9に比して鉄分を多く含み、山砂が黄褐色を呈する。
12　9に比してシルトブロックの割合が多く、黒色土を含む。
13　12に比してシルトブロックの割合が多く、黒色土を含む。
14　ロームブロックを主体とする。
15　ローム粒を主体とし、山砂ブロックを含む。
16　暗褐色土＋山砂＋ロームブロック。
17　黒褐色土を主体とし、ロームブロックを若干含む。
18　山砂を主体とし、黒褐色土、シルトブロック、砂利を含む。
19　茶褐色土、砂質でしまりよい。
20　黒褐色土、かたくしまっている。
21　黒色土。砂質でしまりよい。
22　暗茶褐色土。

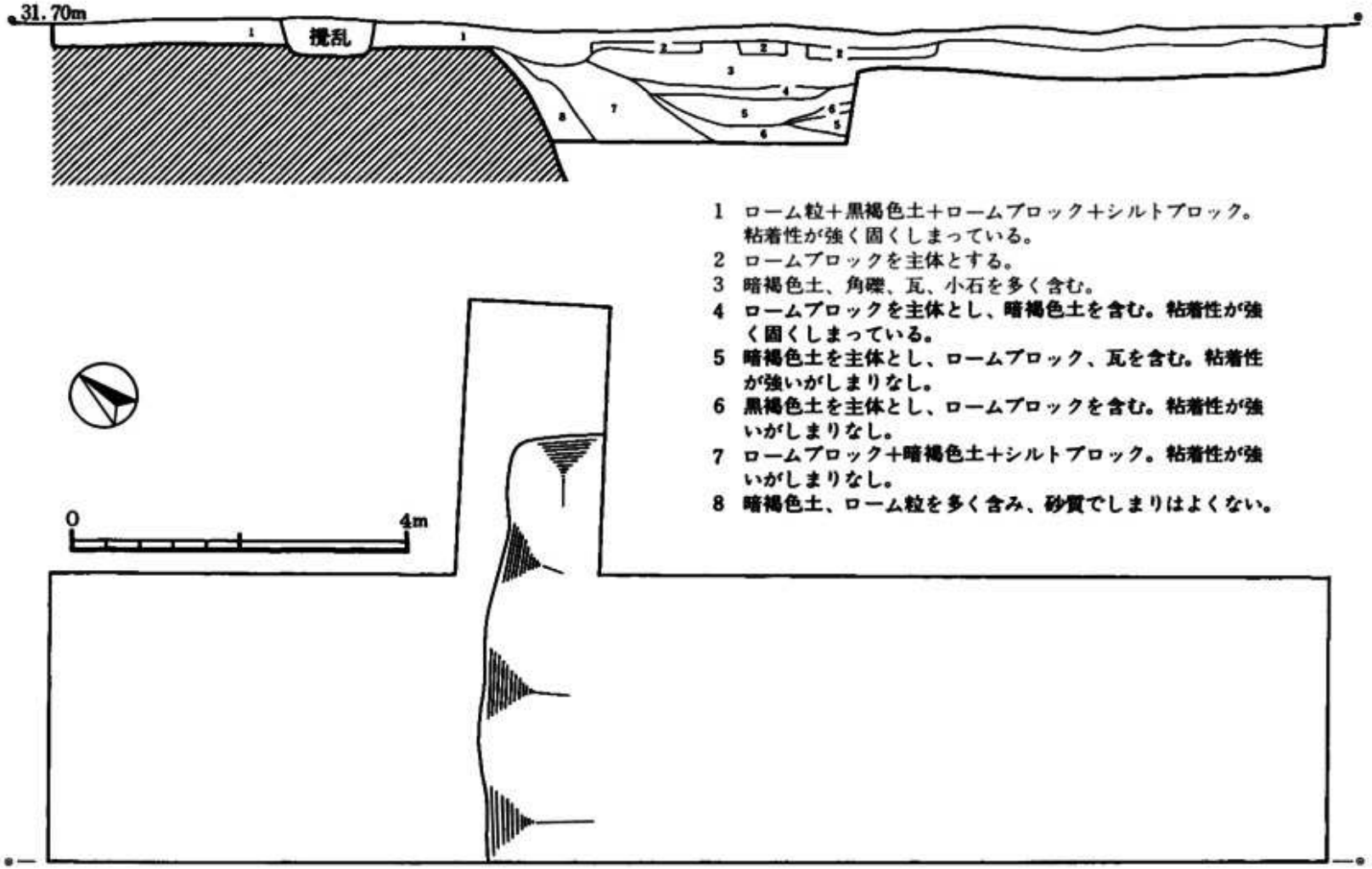


第6図　C1トレンチ拡張図・土層断面図

1 攪乱
2 細砂粒＋シルトブロック、粘着性あり。
3 ロームブロックを主体とし、暗褐色土を縞状に含む。小石を含む。粘着性が強く、固くしまっている。
4 細砂粒を主体とし、ロームブロック、シルトブロックを含む。粘着性が強く、固くしまっている。
5 ロームブロックを主体とする。粘着性が強いがしまっていない。
6 暗褐色土及びローム粒を主体とする。砂質でしまりはよくない。
7 黒褐色土を主体とする。砂質でしまりがない。

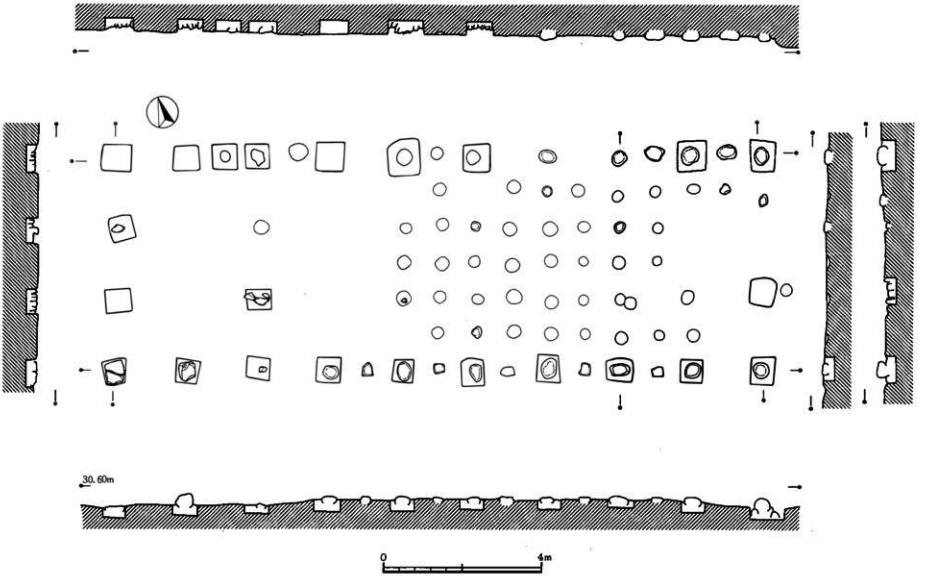


第8図　C2トレンチ遺構検出状況

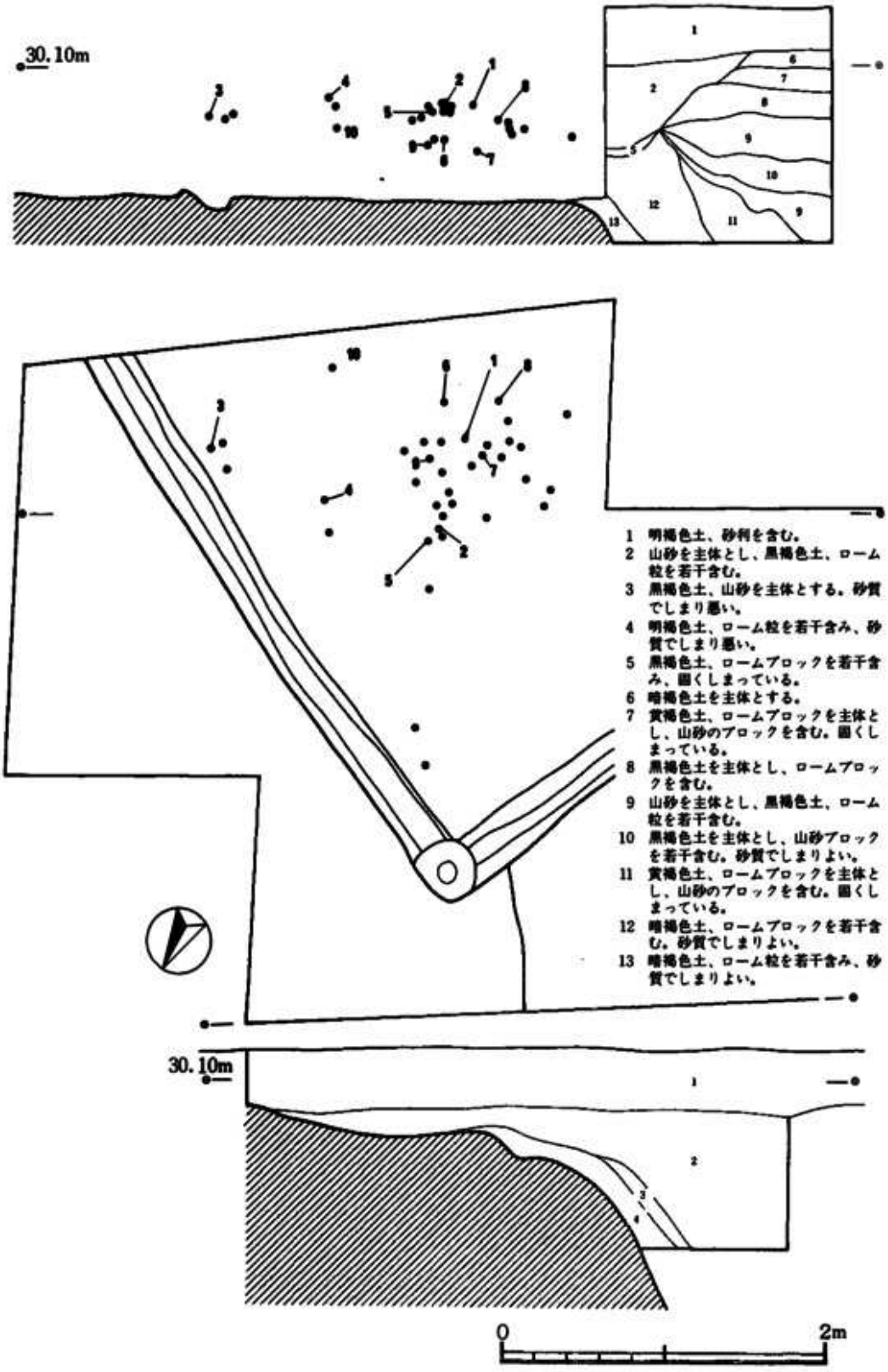


1 ローム粒＋黒褐色土＋ロームブロック＋シルトブロック。粘着性が強く固くしまっている。
2 ロームブロックを主体とする。
3 暗褐色土、角礫、瓦、小石を多く含む。
4 ロームブロックを主体とし、暗褐色土を含む。粘着性が強く固くしまっている。
5 暗褐色土を主体とし、ロームブロック、瓦を含む。粘着性が強いがしまりなし。
6 黒褐色土を主体とし、ロームブロックを含む。粘着性が強いがしまりなし。
7 ロームブロック＋暗褐色土＋シルトブロック。粘着性が強いがしまりなし。
8 暗褐色土、ローム粒を多く含み、砂質でしまりはよくない。

第9図　B3トレンチ遺構検出状況

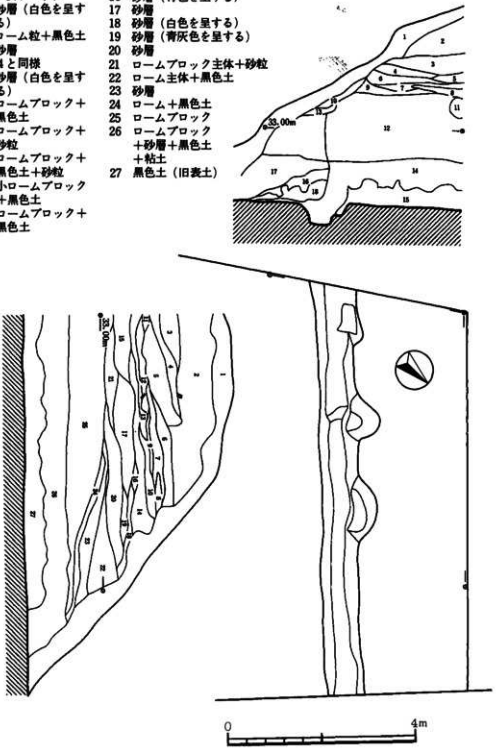


第12図　B4拡張区遺構検出状況

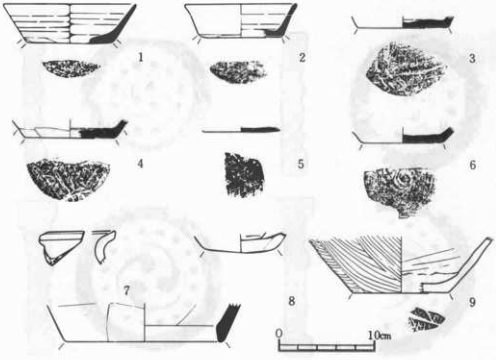


第13図　001号住居跡実測図

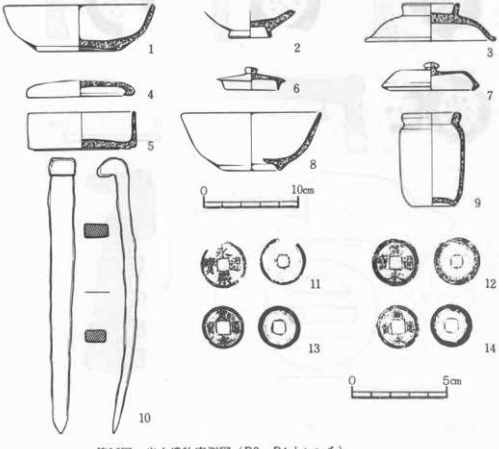
1　表土
2　砂粒＋黒色土＋暗褐色土＋シルトロームブロック
3　砂層（白色を呈する）
4　ローム粒＋黒色土
5　砂層
6　4と同様
7　砂層（白色を呈する）
8　ロームブロック＋黒色土
9　ロームブロック＋砂粒
10　ロームブロック＋黒色土＋砂粒
11　小ロームブロック＋黒色土
12　ロームブロック＋黒色土
13　砂層（白色を呈する）
14　ロームブロック＋砂粒
15　ロームブロック主体＋砂粒＋黒色土
16　砂層（青色を呈する）
17　砂層
18　砂層（白色を呈する）
19　砂層（青灰色を呈する）
20　砂層
21　ロームブロック主体＋砂粒
22　ローム主体＋黒色土
23　砂層
24　ローム＋黒色土
25　ロームブロック
26　ロームブロック＋砂層＋黒色土＋粘土
27　黒色土（旧表土）



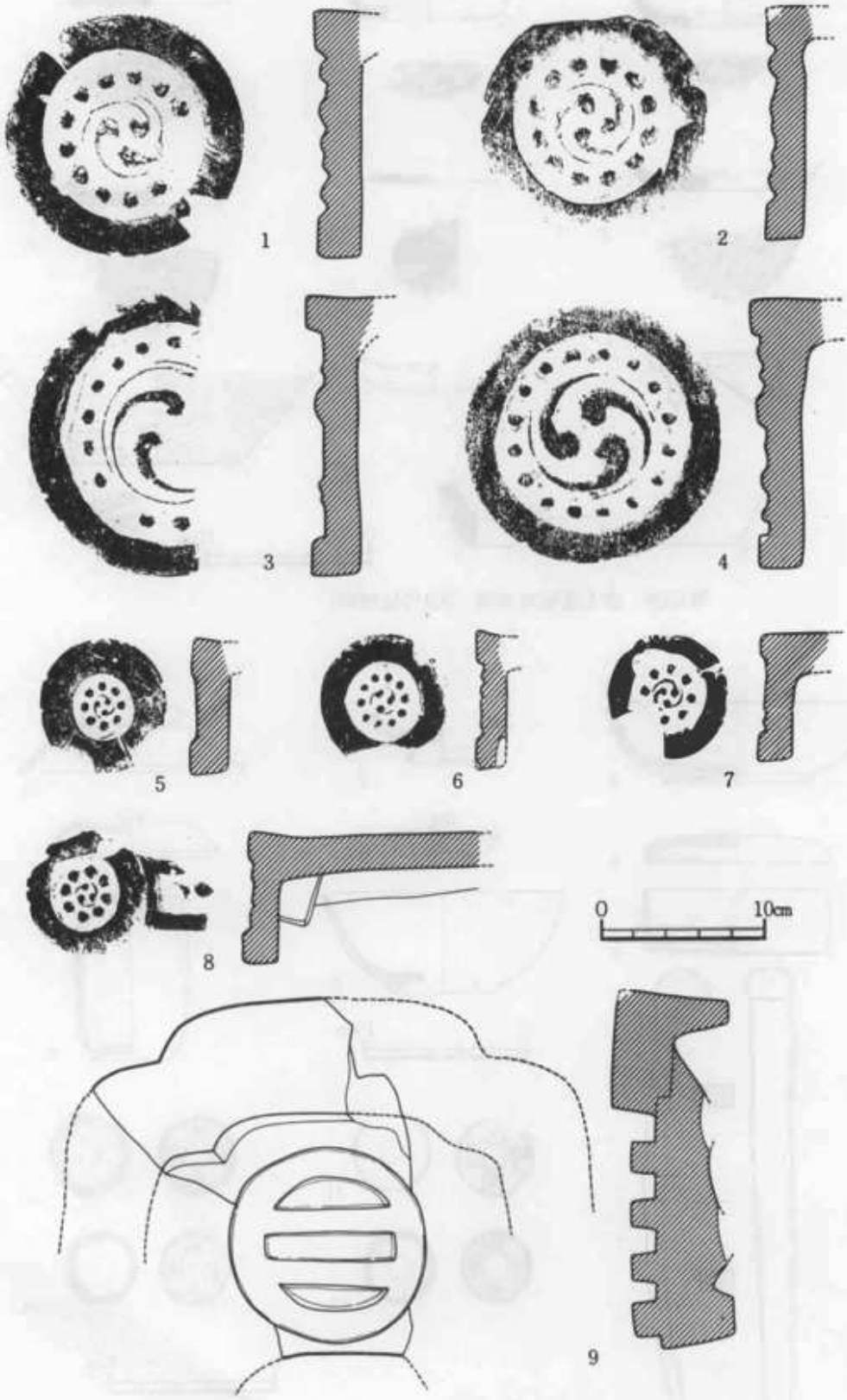
第14図　二の丸土塁土層断面図



第15図　出土遺物実測図（001号住居跡）



第16図　出土遺物実測図（B3．B4トレンチ）



第17図　トレンチ出土遺物実測図（B4. C1トレンチ）

図版 1

B1トレンチ馬出濠

B2トレンチ空濠

図版 2

C2 トレンチ

B2 トレンチ

図版 3

B3 トレンチ空濠（二の丸）

B5 トレンチ

図版 4

B3 トレンチ（二の丸東濠）（上）
C1 トレンチ001住居跡　　（下）

C1 トレンチ（上・下）

図版 6

土器断面

建物跡

千葉県佐倉市佐倉城跡遺構確認調査概報

印刷・発行　昭和55年3月31日

編集
発行　財団法人　千葉県文化財センター
千葉市亥鼻1－3－13　(0472)25－6478

印刷　旭印刷株式会社
千葉市古市場町474-265　(0472)68－2605